

令和5年度第1回倉吉市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和5年5月30日（火）午後3時
- 2 場 所 大会議室
- 3 出席者 広田市長
小椋教育長
田 民 委 員 高橋委員
西田委員

会 議 の 経 過

（進行：教育委員会事務局長）

- 1 開 会 午後3時

- 2 市長あいさつ

皆さんこんにちは、お忙しいところ、倉吉市第1回総合教育会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

普段からいろいろ教育行政におきましては、いろいろなご意見、ご指導いただきながら、本当に感謝申し上げます。

新小学校も、今、順調なスタートを切った中で、教育委員会の方で様子を見ていただいている状況でございますが、非常にいいスタートが切れたのではないかなという具合に喜んでいらっしゃるでございます。状況に応じて、また次のステップに進めていけたらということをおっしゃっているところでございます。

本日は、私の方からは、地域の高校とかの魅力アップに向けて、皆さん方はどんなふうに関心を持っていただけるかなというようなことを少しお聞かせ願って、またそれを県の教育委員会などのお伝えしながら、地域の高校のことを含めた教育行政の推進といいますか、活気のある教育環境、そういったものにつなげていけたらと思っておりますので、本日もまたいろいろ忌憚のないご意見をお聞かせ願って、教育行政に役立てていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

- 3 教育長あいさつ

まず、広田市長におかれましては、貴重な時間を確保して頂きまして本当にありがとうございます。

ご案内のとおり年に2回の総合教育会議で、事務局としては、市長との協議も個別なことで、随時、結構な頻度でさせていただいているのですが、教育委員の皆さんと市長とで直接意見交換をしていただくというのは、先ほど申し上げた年に2回ということですので、本当に委員さん方の方からたくさんのご意見がいただけるように、今日の会の運営も進めたいと思っております。

定例の教育委員会に引き続いての会で、大変申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願い致します。

4 報告事項

- (1)令和4年度倉吉市教育行政の点検及び評価について
(資料により教育委員会事務局長説明)
(意見なし)

5 協議事項

- (1)中学校での進路指導について
(資料により学校教育課長説明)
(引き続き 教育長説明)

委員 資料の中で、中部外へ進学する目的で、スポーツで行くのか、高専とありますが、専門で勉強したいのか、あとは大学受験の目的で、高度な勉強をしたいので進学率の高いところに行きたいとか、このあたりの分析というのはいかがでしょうか。

教育長 わかる範囲でよろしいですか。

部活で中部以外の高校を選ぶという割合の生徒が多い感じはしています。例えば大学進学のことを考えて、資料に記載しております県立高校東部、或いは県立高校西部というところがどちらかというに進学。私学の場合には、ほとんどが部活動だというふうにとらえていただいてもいいのではないかと思います。県外は、これもほぼ部活動です。

委員 私の知り合いの中で、不登校で中学校を修了して、それから何年か間を置いて、鳥取市の中高一貫校に通い始めてから元気になったというケースがあるようで、子どもにとってはどこかいい場所があって、きちんと学力をつけるところがあれば、いいなと思います。

それから最近聞いた話では、サッカーでプロでやっておられた方が今年から専属で倉吉北高校の監督をやられて、一年生がまとまって入学したというような話を聞きました。実際に確認はしてないんですけども。

そうしてみるとやはり監督なり、そういった方のいるところに集まってくるのかなと思います。

去年、一昨年の倉吉総合産業高校の野球が強かった時のように、野球をやっていた子がそこに集まってくるということもあるのかなど。これが高校の魅力なのかというふうに感じたりはしています。

市役所としての施策として、中学校で総合学習ふるさと学習の中で、広田市長の音頭で作られたデジタル版の企業ガイドブックの中で、中学校の2年とか3年あたりで、ガイドブックを見ながらその製造業を見てみたい、とか、ここに行ってみみたいというようなものを生徒がチョイスして、それを見学に行く、そうすると将来的に大学を卒業して、ここにあったから帰ってこようとか、こういう勉強をした方がいいというのであれば、県外の高校に行くかもしれませんが、そういった企業との接触、交渉が学校教育課だけでは手一杯なので、経済観光部とかに企業とのマッチングをしてもらおう。学校、教育委員会としては、学校現場でアンケートをとって行きたいところを絞ってもらおう、そういった協力体制ができないのかなと考え、魅力アップになるのではないかなと思います。

市長

ありがとうございます。

そういった意味合いも含めて、もともと今ご紹介いただいたガイドブックが鳥取短大や看護大の生徒さんと意見交換をした時に、地元どんな企業があるのかわからないということで、いい企業は都会の方にしかないみたいな感じで、本人もさることながら、保護者の皆さんもいい企業に就職しないといけないと思うと都会の方に出るしかないというように思っておられないのかなあと感じて、身近にもこんないい企業があるということを、子どもも含めて保護者の皆さんにも知って欲しいというのが、思いだったものですから、今言っていたようなことで、多くの人にそのことをよく知って欲しいとは思っています。いいご意見ですので、市長部局の方でも、そういったことを学校と連携できたらと思います。

非常に私でも感動したりして、こんなロボットみたいなものは、いわゆる従業員で作ってしまいますからとか言われて、物を運んだりする、そのロボットは、行き先を指示すると、自分できちんとそこに持っていくとか、大企業とかでロボットが次から次にものを作っていくようなものを見ている、ああいうものを全部これ従業員が作っているのですよとか、それを見たとき、なんという高度な人たちがおられるのだろうとびっくりしました。

だから都会の方に1回出て、色々な技術なり知識なりを持って、地元に戻ってきてそういう受け入れ体制というのは十分ある。あなたたちが働く、そういう能力を発揮する場所として、いい企業がたくさんあるのだということを、みんなに知って欲しいと思って、これからどんどん活用して成果をあげたいと思っていますね。

委員

拝見させていただいて、こんな企業があったんだなど、改めて、こういう企業は、こうだったなというのを思い出したり、新発見があったりするので、

非常にいいものがあるので活用しない手はないと思いましたがものですから。

市長

ありがとうございます。

倉吉東高校が定員割れをしているとか、鳥取中央育英高校はかなり定員を満たしてなくて、町長も高校がなくなってしまうのではという危惧をされている中で、先ほど言われたような、地元プロのサッカーの指導者がおられるとか、もっともっと特徴を挙げていただいて、倉吉総産高校にしても、倉吉西高校にしても、自転車の素晴らしい選手がいたり、それに対する指導者も当然おられるでしょうし、もっとどんどんアピールすれば、そんなに東部や西部までの通学時間を考えると、もったいないと思っているものですから、定着してくれて、最終的にふるさとに戻ってくるUターンに繋がるとか、そういったことにも繋がりはしないかと思って、状況を聞いたのですが、私たちの時にはなかった高校の訪問が、今はあったり、事前に色々な情報を生徒の皆さんに与える場面もあるのだなと思ったところでございます。高校ぐらいいまではしっかり地元で居て欲しいと思っています。

委員

今コロナでなかなか職場体験ができなくて、五類に緩和されて、段々体験もできてくるのかと思っています。

うちの子も職場体験が結構楽しみで、色々な業者・企業が回れるので、それも結構よかったと思ったのですが、受ける体制はなかなか厳しいものがあって、私の職場も来月、北栄か湯梨浜の中学校から久しぶりの体験に来てくれるということでしたので、やはり地元のそういった企業があるということは高校に入る前に中学校のころからしっかりと見ていただければ、そうしたら、この高校に行って色々しようかな。というのはあるのですが、片や高校に行くと、今中部には土木科というのがなくなってしまって、結構土木の関係者に聞くと、技師がないというような状況で、危惧されているところです。情報系もなくなってしまうので、鳥取まで行かないといけないというのがあったりして、そこのマッチングがなかなかうまくできてないような感じもあって、東部西部にいく子も、もしかしてその関係もあるかもしれないですが、これは県の教育委員会になるのですが、中部の方にもそういう関係や専門的な科があれば、また少しは違うのかなと思います。土木業界も本当に人がなくて、仕事はあるのだけでも、人がいないから、請けられない、仕事がなかなかできないというような状況をよく聞いて、なかなか大変ですというのはよく言われるのですが、その辺のマッチングができてないのかなと思うのですが、ぜひ鳥取県に、中部に帰ってくることになるような施策なども進めていただきたいですし、日本海新聞でも、今色々な地元の企業の若い子の特集みたいなものをされてますので、そういう鳥取県に帰ってきた色々な話も、中学生なり、高校生にさせていただくといいのかなと思っています。

この前小学校の卒業式に出たときに、いつも卒業生が将来何々になります

と、結構たくさん言うんですけども、今年は声が小さくて、何か一通りの仕事で、これもコロナの関係なのかと思いながら聞いていました。昔はプロのサッカー選手になりたい、野球選手になります、一級建築士になりますとか何か言っていましたけど、今年はあまり、思ったほどなくて、何か将来大丈夫かなというちょっと危惧したのがあって、やはり小学校からも、こういう仕事に就いてみたいなという学習なども入れていただけたらと、今年の卒業式で感じました。

委員

市報の裏のところに、こんな企業がありますというのを特集されているのを見て、今の子どもたちは自分の好きなことを仕事にできるとか、そういうのがワクワクするという子も増えてきていると思うので、そうやって好きだった会社をわざわざ探して、僕はここに来てこれをしてますと言って、倉吉に来てくれた人からそういう話が、中学生とか小学校の時でもいいので、実際に話が聞けるといいなというのは、市長が感動されたように、子ども自身が感じる機会が一回でもあればいいなというのは感じています。

高校の先生と話をしていて感じるのが、子どもたちがやはり少しずつ変わってきてるから、例えば県立の高校のように5教科頑張りましょうと言われるのは結構負担になったり、それよりは良いところがあるね、ここを伸ばそうか。というわれ方をした方が、意外と全教科が上がっていったりとかする子の方が増えてきているので、5教科を全部頑張りましょうみたいな感じで言われると、きつくて、苦手をどう頑張ればいいのかみたいな感じの子も増えてきつつあって、何か、そういうちょっとマッチングがあってないねということも、高校の中で見受けられる場面もあるという話をされてるのをちらっと聞いたりもしたので、ちょっと私立の高校の方が自分には向いてるかなとって選ぶ子も少し出てきてるのかなあと感じたりします。

高校によっては、バスが倉吉駅まで来ているとか、通うのにすごく便利で、どうしてもそういう高校を選んでしまうという話を聞いたりもしていて、色々な選択肢が増えてきてしまっているということもあるし、子ども自身も少し色々なタイプの変わりつつあるところもあるのかなとは、思ったりしています。ただ、そういう子どもたちだからこそ、その子たちに倉吉にこんな会社があるのだというのを、子どもの時に、バックアップしながら、聞くという体験とかがあれば、覚えていて、やはり倉吉に帰ろうかなと思ってくれる子がいるといいなという気持ちがあります。

市長

工場見学というのは、小学校ではないのでしょうか。

教育長

修学旅行で広島に行った時は、マツダの工場見学をしています。

県内の工場見学は、大山乳業に行く小学校があるかもしれません。

学校教育課長

中学年位の子が宝製菓とか。

教育長

先ほど話題になった中学生の職場体験ですが、コロナが五類になったので、多分一気に戻ると思います。市役所にももちろん来ますし、色々なところに

出かけていくと思います。

委員

市が、進出企業等色々なところに助成しますよね。そういったところはどんどんその職場体験ではないですけども、見学を受け入れていただきながら、学校で学ぶ理科とか、色々な問題を生徒自身がこういった活用をされているのだとか、そういう勉強をもっともっていただきたい。総合的な学習になるといいなと思っています。先ほど委員がおっしゃったように、中部に土木とかがないという状況、今日、日経新聞に積水さんが高卒を今年度か来年度に大量に採用、要するに30代から40代前後で辞めて、自分で独立する社員が多いという中で、それから2024年度は時間外労働の規制が入るので、その関係で人手を抱えておかないといけない、休みを与えないといけないということが書いてありました。多分大手企業等で採用人数が増えてくるのではないかと思うのです。ということは、地元の企業さんも時間外問題が当然出てきますので、人手が欲しいというニーズはあると思うのです。今更また作っても間に合わないかもしれませんが、そういったところに行政として、県下挙げて手を打っていくというのも一つ大事な魅力づくりなのかなというふうには感じます。

教育長

例えば先ほどの職場体験ですけど、受けてくださる事業所に市から何らかのお礼をわずかでもするとか、単純ですけど、そういうことでも大分受け入れが変わってくるんじゃないかと思うんですけど。

市長

お礼がいるかどうかは別としても、今おっしゃられたように西倉吉工業団地とかの製造業さんでも本当、人材が欲しくてたまらないという感じで、結構拡張もし、それに向けてこれからの計画もまた次から次にある中で、喉から手が出るほど欲しいと思いますから、協力はしてくださると思います。私ども行政もさせてもらったり、何かあれば対応できるかどうか担当課を通じて聞いてみます。

そういう職場、学校体験もしつつ、こんな学校があればいいとか、委員がおっしゃったように、例えば国立大学に行かないといけなときは全部の教科を勉強しないといけなけれど、自分の好きな理系とかそちらの方でいけば、2・3科目で得意分野を生かしていく道もあったりするので、その辺りの次の大学に向けての進路指導なども聞いていて、私たちの頃も、倉吉東高校はとにかく国公立に行くようにと言われたような気がしますので、とにかくみんな勉強しないといけなという風潮でしたから。今はどうかわかりませんが。

教育長

今も基本はそうです。

市長

国公立ですか

教育長

はい。基本はですね。

でも大分私学に進む生徒も増えております。昔に比べたら。

委員

一時、倉吉東高校が全員国立に行けという進路指導をやっておられたよう

な記憶があるのです。私たちの頃は5教科やって点数を取るものと、3科目、2科目で得点とするものとで何か大学を選んでいたような気がします。

市長 そうですよね。社会の代わりに数学で受けられるとかで私立目指しているところもありますし。

教育長 倉吉東高校のスタンスは、人間力を高めるためには、5教科7科目を勉強するということから始まるという考え方が残ってます。

委員 その辺りかな。

委員 1年生の最後の進路の希望を書くときは、国立大を書きましょう。と書いてある。

教育長 だからと言って私学に行ったらいけないというような指導はありません。もちろんありませんが、やはり基本ラインを変えずに保っておられるという感じはします。

 (その他意見なし)

事務局長 ありがとうございます。先ほどの話は、経済観光部なり、仕事定住の部署の方にもつなげて、また協議を進めていきたいと思います。ありがとうございます。

(2) 中学校部活動の地域移行について

 (資料により社会教育課長説明)

委員 これは4月から始めてすごく問題がある状況です。私も外部指導をずっとしておりますが、日本スポーツ協会が4月から地域のクラブにも移行できると。部活動にも入っていいし、地域のクラブにも入っていいということで、私が行っている競技では東部から西部まで10～11団体の地域のクラブが出ていて、強い子はほとんど8割9割はそちらに移ってしまいました。そこに強い子が集まると、中学総体に出られますから、そこで勝てば中国大会、全国大会へと行けますので、強い子が入れば、皆集まってくるという状況です。一番の問題は、外部指導をしていて、その地域のクラブに移行した子も部活動をしていいので、一緒に部活動をします。けれどもその子はライバルなのです。中学校で団体戦に出ますし、地域クラブも団体戦に出ますから、ライバルの子も来ていますので、その子と一緒に教えるかどうか非常に悩ましい状況です。でも部活動に来ていますので、一緒にしないといけない。放っておくわけにはいかないので、ちょっと向こうで練習しておいてねというふうにしますけども、これは非常に問題で、先生もどうしてよいか、その子がキャプテンになっていますから、非常に悩ましいところです。

 他のクラブからそこに入ったのですが、中学校であれば、ほとんどお金が要りませんが、クラブに入るとお金が要ります。コーチからもっとお金を出してくださいと言われるのですが、何故そこまでお金が必要なのかといわれる保護者の方がいます。でもそれは自分が希望してチームに入っているの

ですから、そこは道具から何から、自分たちで運営していかなければならなくて、体育館の使用料も自分たちで工面しなければならないので、それは必要ですということを保護者に説明しないといけません。多分月額でも1万円とか会費を払わないと厳しいと思います。指導者にもそれぞれお金が必要になりますから。

そういう状況でお金を中学校なり市の方から補助ができませんかといわれるのですが、今の制度では多分そういう事は無理でしょうという具合に言って、移行して2か月になり、中学総体がすぐにあります、中々難しい状況になっています。

本来ですと、土日だけ地域移行にして状況を見ながらした方がよかったのではないかという感じはします。土日だけ地域の色々なクラブのところに練習に出向いてからの方がよかったのではないかと思います。日本スポーツ協会も方針を出されてしまったので、どうしようもない。都会であればわかります。都会であれば色々な競技の団体がありますから、それにお金を払うということは必然的になってきます。そう言うことが当たり前だと思っていますが、地方の場合はそういうわけにはいかないのです。色々なところに行くにも移動のこともありますし、保護者が連れて行かなければならないということもありますので、その移動手段をどうするかという問題もあります。

地方でいきなりこのやり方は中々厳しい状況かなということもあります。多分県の方も今、色々整理されていると思いますし、これから協議会とか立ち上げられると思います。今、すごく混乱しているような状況だなというのが私の感想です。

事務局長

ありがとうございます。

今、会費のことが出てきましたが、やはりその大きいところが指導者への謝礼だとかということがあると思いますが、その辺りは今まで教員がやっておられたということですのでよろしいですね。

教育長

そうです。

もし、仮に受け皿になる団体であるとか、そもそも指導者が確保できないのですが、教員でない外部から指導者を確保したら、お金が必要になります。それが全国で何千万円なのか何億円なのかはわかりませんが、今まではそれを教員が全くの無償でやってきたということです。スポーツ庁が目指しておられるところは、中学校から部活動を切り離すこと。「最終的には」という考え方ですので、人口4万5千人の倉吉市がどうやって外部にということになります。

もしかしら最終的には地方公共団体が何らかの受け皿になる組織をつくれと言われる可能性も無きにしも非ずで、本当にできるのだろうかということが正直なところです。

委員

今更ながらですが、スポーツ庁の考え方というのは、要するにオリンピッ

クとか大会に出て好成績が取れる選手を作れという意味合いなのか、中学校までは、教育という一環で、とするのかこれによって考え方が変わってくると思うのですが。

例えば教員へのアンケートで、土日はしたくない人が多いですよ。これほど多いとは少し驚きでしたが。学校へ訪問する中で、部活は教育の一環だと言われる先生もおられたし、いやいや本当は出たくないのですねとおっしゃる先生もおられて、その割合は6対4くらいかと思っておりましたが、こんなに差がつくとは驚きでした。

短絡的な話をしますが、先ほど委員がおっしゃったように地域移行は土日、学校での部活動は平日だけ、更にやりたい子は地域移行のどこかのクラブに入ればいいのかと。だから平日は今までどおり学校の先生が面倒みるということが単純なのかというふうに思います。

教育長

教員が土日に希望するかの割合の話ですが、これは多分、地域移行という言葉が大きく先行していて、今まではほとんどの教員が部活をしないといけないと思っていたのが、それがしなくても良いと思ってしまった結果だと私は受け取っています。

それからスポーツ庁が提唱されるのは、これだけ子どもの数が少なくなったら、単独の学校では満足な運動、文化も含めて部活ができないということからですから、日本一、世界一を作るという競技スポーツに偏っていない。表向きにはそういうふうにごまかされるように受け取っています。とにかく子どもたちのスポーツの環境を整えるためには、学校だけではもう無理な状況、時代になっているということをおっしゃられます。

委員

それは学校で言う体育ではないということで、全く学校から切り離して、スポーツ庁が各市町村、県を中心にお金を出して団体には援助していくというのが筋ではないかと思えます。

委員

一つ問題があるのは、中学校は必ず部活をして、色々なスポーツがあるのですが、今度地域移行になると、やらない子が増えてくるような気がして、初めてこういう競技をしたと言ってそのまま3年間する子もある。そういった子は全く希望になりますから、全くスポーツをしない子は帰って勉強をするかというところでもない。そうなる中学生の運動能力はどうかというすごく危惧する面もあって、結構部活動の中で体力的にも鍛えられているとか、人間関係もその中で培われていくのかなということもあると思うのですが、それがなくなってしまうというのも、確かに先生の働き方改革の考え方も確かに必要ですし、中々難しいし、競技人口も減るのかなという感じです。減ると今度は協会に登録する人が減ってしまうと、協会登録の費用が厳しいというところも出てくるかもしれない。色々難しい問題が出てくるし、今度、中体連が多分なくなってしまうから。協会がきちんとそういう大会をしてくれるかとなると、そこも中々難しい。

- 委員 大会が別立てですからね、学校と。
- 教育長 今、委員が言っておられることは、本当に大きな課題だと思っていて、県1位になりたいという思いはないけど、ちょっとスポーツしてみたいという子が活動できる場をなくしてしまう心配というのがすごくあって、ではクラブでしなさいとなった時に、保護者が何らかの月謝や会費を払いに行かないといけないですね。何故、月に何万円も払ってそんなところに行かせなければならぬのかという家庭もあるわけですから、本当にその辺りをどうするのかということをしごく心配をしています。
- 委員 個人的に言うと、やはり学校で4時までは、学校の先生に部活をしてもらって、休日はフリーだと。これだと何かすっきりするのではないかと思います。テレビを見ていたら、都会の野球チームなんですけど、データ野球なんです。君の投げた球は回転数がいくらだからこういうふうには投げなさいとか、全部分析して指導していました。多分親が、相当なお金を払って行かせているのだと思います。そうすると益々格差が広がってきますよね、そういうところに行かせようかと思ったら、確かに今おっしゃるように、その格差を広げるような施策になってしまってもいけないし、今のよう、やはり体づくりというのは基本的に大事なことですし、小学校、中学校でかじったものが、大人になったときに、地域のソフトボール大会で選手になって頑張るとかです。色々なことをやはりさせていかないといけないというのはもちろん大事なことですし、いきなりこう地域移行と言われても答えはないですね。100%皆が満足するような答えは出てきません。
- 市長 今はもう、熱血先生というような先生はもうあまりおられないということですか。
- 教育長 そんなことはないですが。世の中の流れが中学校から部活動を離してこうという。
- 確かにそうになっています。
- 部活を力いっぱいしたいと思っている教員も一定数はいます。
- 市長 一生懸命の先生とか、自分の子どもの時もおられたし、親も例えば吹奏楽部であれば、ワンボックスカーを持っておられるお父さん方が、とにかくこの日は空けてくださいとか言われて楽器を運ぶので大変だったし、サッカーで西部の方に行くとなると連れて行かないといけませんね。保護者もしていたような気がするのですが。
- 委員 東南アジアとか色々な国、他の国で考えると、日本の部活動があることで、すごく中学生とかの運動とか能力は、やはり日本が高いという調査があるというのを聞いたのを思い出しました。中学に上がった時、我が家の末っ子が剣道部に入って昨年まで優れた指導者がおられたが異動になって、新しく若い先生が来られたが、2年、3年で道場に通っていて、その先生に教えてもらっていた子の方が詳しくて、新しい先生は1年生と一緒に竹刀を振って

るみたいな感じの部活だったのですが、その分先輩がよく知っていて教えてくれているのですが、1年生になったばかりのうちの子とかは、そんなに真剣に剣道をしたわけではないのですが、見学の時に剣道部のしていることが楽しそうだから入部したいなと思ったから剣道部に入ってみたと言っていたのですが、剣道部は段階があって、土曜日に別の中学校で元々おられた先生や校長先生も教えてくださっていたから、もう少しやってみたいなと思ったら、そういうところに行って教えてもらえるという機会があって、もう少しうまくなりたいたいなと思ったら、先輩たちみたいに道場に入ってというふうにすごく気持ちいい段階があって、子どもたちがやってみたいなというふうに始めたら保護者も安心できると感じていて、道具とかも一式貸していただいている、道着も貸していただいている、買ったのは竹刀と最低限のものだけで、部活動って本当にすごいなと思いました。いきなり剣道を始めると言われて、続けるのか辞めるのかわからないのに、最初から色々な道具を買っていくとか月謝を払ってということは我が家はできないと思いますが、子どもがやりたいと言ったら、頑張って応援してあげたいけど、先生が指導できなくても、教えてくれる先輩がいれば、その人に少しずつでも教えてもらえるみたいな形でも、部活があるというのは保護者としてはありがたいと今はしみじみと感じています。世の中の動きとは逆行しているのですが。

事務局長

ありがとうございました。

教育長

結構大きな課題だというふうに思っていたいておくありがたいのですが、本当にこの問題どうするのかと思う事ばかりです。

委員

先生のことを思えばとは思いますが。

事務局長

県が夏ごろをめどに方針を出されるということがございますので、その辺りの情報収集もしながら、1市4町でどう取り組んでいくのか進めていければと思っております。これについては引き続き課題として取り扱っていければと思っておりますので、よろしく願います。

(3) 小中学校不登校支援について

(資料により学校教育課長説明)

委員

自分を休ませる方法という精神科医の先生が書いた本があって、この中に、休むのには4段階あってというふうな方法が書いてあったのですが、その中で第一段階は、とりあえず安心できる環境だということをもとに作ってあげないといけない。そのあと、好きなことが少しずつできるようになってくるとか、色々な段階があると書かれていました。第二段階が睡眠や食事のリズムが整う。第三段階が好きなことならできる。第四段階が未来に向かって動く。そうなると、第四段階ぐらいか、第三段階の途中ぐらいからは学校にお願いすることがあるかもしれないけど、多くの最初のところは、家庭の中で、子どもに親が関わっていく中で回復していくのかなということが、とても大

事だなど思うのですが、子どもが不登校になると、なかなかそういうふうな気持ちにすぐなれないもので、だから、その上孤立した孤独な気持ちにもなったりすることが多く、なかなか学校に対しても、子どもの状況はこうですと、なかなか冷静に話ができないとか、色々な難しいことが、初期の段階で起こってくるのではないかと思うのです。そのために、第三者的な感じで、スクールソーシャルワーカーが関わってくださる。また、そういう方が学校と一緒に支援会議に行っていて、子どもさんは、こんな状態ですよとか、そういうのを学校に話をしてくださる。お母さんとかお父さんとか子どもの立場になって、学校に応援するような形で伝えてくださるとい方がいらっしやると、支援会議の時にすごく心強いのではないかと。心強いと変な気負い感になることも少ないのじゃないかなということは感じるがあるので、派遣の依頼が多い家庭訪問をしてもらえるというような感じであれば、是非増やしていただくことが、親のため、子どものためにもなるのではないかなというの強く感じます。

もう1点、中学校が不登校に対してすごく取り組みをされているというのをすごく感じるのですが、小学校の時からも、中学校が今取り組んでいるぐらいのことを、また参考にしながら、小学校の不登校対策も、頑張っていたらとありがたいかなと感じる時があります。

委員 率は高いのですけども、変容の状況が増えているということはいいことではないかと思っています。少しでも変わっていくということが大切だなと思っていますし、多分スクールソーシャルワーカー6名では中々足らないので、もう少し増やしていただければいいのかなとは思っているのですが、予算的なこともあるでしょうが。

学校教育課長 そうですね。お願いはしておりますが、引き続きこれで行こうと思っています。

委員 長中期不登校児童生徒に関するアセスメントシートとはどういうものでしょうか。

学校教育課長 実態を把握するための調書のようなものです。各学年での状況を記入したり、保護者との会議をとおして、そこで目指していく方向性であるとか、色々な参考になることを書いていただいております。そこにスクールソーシャルワーカーさんにも入っていただいて作成していただいております。

委員 やはりそこに関わる人が増えていけば、教員の負担も減っていくのかなという気もしますし、フリースクールがもう少し市内にあればいいという気がするのですが、そこに自由に通えるというか、学校に一つあればいいのですが、2校の一つとか、そういうのが増えれば少しずつ違ってくるのかなと思いますので、予算との具合もあるのですが、そこを何とかしていただければいいのかなという感じはします。

委員 委員がおっしゃったように、保護者の不安を取り除くというか、今話を聞

く中では子供にとって一番いい影響があるのかなと思いました。子育ての前に、妊娠がわかって母子手帳をもらって、出産までの十月十日、それから出産後の産後ケアを含めた時に母親の情緒が安定すると、赤ちゃんも子どもも穏やかに育つという延長で言うと、やはりその不登校にしても、いじめ問題にしても、保護者の方のケアというか話をゆっくり聞いてあげるとというのが、一番はじめの取っかかりかなと思いました。

教育長

冒頭事務局長の方から、福祉課であるとか、子ども家庭課との繋がりみたいなところも本当に大事だと思っていて、スクールソーシャルワーカーの活動時間を増やしてもらうということももちろん大事なのですが、先般不登校ではない事例なのですが、ある中学校ですごく家庭の状況が困ってしまった生徒があって、すぐに学校から子ども家庭課に連絡したのですが、子ども家庭課はすぐ福祉課に連絡して、迅速に動いてもらって、その中学生をきちんと安全に過ごせるところで確保ができたという例があって、すごくありがたかったです。だから、そのケースは不登校ではないと申しあげましたけど、不登校についても、福祉課や子ども家庭課には保健師の資格のある人が配置されておられるので、仕事を増やすのは大変申し訳ないと思いますが、不登校についても、何かもう少し学校教育課なり、教育委員会と上手に連絡、つながれるようなことが何かできないだろうかというのは思っています。

委員

今のスクールソーシャルワーカーに保健師のOGさんがおられますよね。

教育長

おられます。

委員

そういう方が少しずつでも増えて、短時間でも人数が増えていくというのがありがたいとは思っています。

市長

教職員以外の支援の状況は、フリースクール、スクールソーシャルワーカーさんよりも医療機関だとか専門機関の方が多いのではないのですか。

生活も家では自由というか、部屋に閉じこもってというか、何か昔のそういう印象みたいなものはあまり感じない。

先ほどの家庭の支援というか、医療機関、児童相談所だったり、福祉課やそういう専門機関が、しっかりその辺は連携して、教育委員会だけではなく専門部署や担当部署というか福祉やそういったところと連携をしていく状況みたいな部分で、必要な担当部署がやはり協力していく必要があります。

委員

不登校の当初の原因でもなかなか判明はできないでしょうし、色々なことが重なって起きているのしょうけども、そこがわかれば、手は打ちやすいのしょうね。

だから学力だったら学力つければいいということでしょうし、経済的であればそれを支援していけばということなのでしょうけども、なかなかそこまでのアセスメントができていくかどうかということだと思いますね。

事務局長

医療機関ですけども、例えば、児童生徒にお腹が痛くなるとか、頭が痛くなるとか、原因がはっきりしないけども、そういう症状が出る場合に、その

医療機関にかかりつつ、心の悩み相談みたいなどころにも繋がるようなケースがあるというふうなことも聞いたことがございますし、精神的な部分で、後になってから大きくなってから、発達障害というのでしょうか、そういったことがわかってくるということもあるように聞いておりますので、そういった部分でのこの医療機関にかかるケースがあつたりするかなと思います。

委員 最初はなかなかわかりづらい障害があり、とりあえず、学校医に相談と思つても、専門のお医者さんのところで、実際に検査をしていただいて、それがそうだというのがわかるらしいのですが、そういう専門的な知識がある方に学校の先生とか、不登校担当の先生が助言してもらつとか、そういうのがあれば、親子が救われる機会も増えたりしないのかなということを感じたりします。

事務局長 こちらの不登校支援も引き続き大きな課題ということで取組んでまいりたいと思います。ありがとうございます。

(4) コミュニティセンター活動の充実に向けた部局間の連携について

(資料により社会教育課長、市民生活部地域づくり支援課長説明)

市長 このコミュニティセンター化以降のまちづくりに関する取り組みの、社会教育の意識が低くなっているというのは、これは、現状として、具体的な内容は、どのようなことですか。

社会教育課長 社会教育、地域づくり、これまでは社会教育を含めて取り組んでもらっていたのですが、地域づくりも加わったということで、どちらかという、地域づくりの取り組みの方に重点を置かれる地区が、多く見られるのではないかとこのことでございます。

具体的に言うと、例えば地区の運動会ですとか、祭りですとか、華やかな賑やかなイベントごとなどをやることによって、満足を得ておられるような傾向があるのではないかなというふうに我々は感じています。

でもそういう一つ一つの行事を充実してやっていくということにはやはり、社会教育というものも職員さんを含めて、意識してやっていただくことが必要ではないかということですので、どちらも衰退することなく、やっていただきたいのですけども、社会教育という方の意識がちょっと低くなっているのではないかなというふうにとらえているということです。

市長 そうは言っても、運動会とか従来からやっている事業をそのまま継続してやっているわけではないのですか。この社会教育の意識が低くなったというのは、具体的にはどういう現状があつてなのか教えて欲しいなと思つて、社会教育の意識が低くなったという声があるとか、逆に言うと地域づくり支援課の関わりが弱いということ、弱つていても、今の話でいくと、まちづくりはどんどんやられているという話も、逆にはあるわけで、別に行政が関わらずでも地域でそういったまちづくりに向けた取り組みが、実際地域の方々

で活発にやられるのであれば、それはそれでいいのかなと思うのですが、その社会教育の意識は、低くなったと社会教育委員協議会の方では、関りが弱いのではないかということの観点とすれば、具体的に何が減ってしまったかありますか。

社会教育課長 具体的には研修に対する意識が低くなったりですとか、その地域においてのコーディネーター役とか、まとめ役とかという意識が低くなることによって、それがひいては人材育成だとか、後継者の育成だとか、地域においての役をしてもらう方の跡継ぎがなかなか少なくなっていくだとか、そういうはっきりしたことというよりも相対的に、いわゆる社会教育という意識が低くなったのではないかということを感じているということです。

教育長 例えば、研究指定事業はやめたいとか、社会教育課長が言いかけたのは、その研修はもういいというような声が上がってくるとかそういう事だと思えます。私が個人的に心配してるのは、市内の13地区が、ある程度の社会教育のレベルを今までずっと保ってきたんですが、地域によって差が出てきている感じがしています。

市長 その差は何ですか。下がっているのは何が下がっているのか教えてください。

教育長 研究指定事業はもういいとか、研修に積極的でないという事です。

市長 けど、それはまた地域の人達の声だろうとか、参加者もだんだん高齢化したということで、参加も少ないとか、そういう難しいテーマの時には参加が少ないとかという部分で、例えば、人権問題だとかはずっと別途継続されつつありながら、社会教育のその中で研究指定事業が、なされないという部分は、そのテーマがやはり地域の課題解決にきちんとマッチしてないとか、皆さんの思いと少し違うのではないかとか思ったりして、地域でその防災だとか福祉だとか色々なそういう課題を解決するための組織だったり人づくりだったり、そういったものがしっかり今できているのだろうかというところを私自身は少し心配して公民館の自治活動の中でも、やはり役員とかのなり手が少なかったり、跡継ぎというかその時点も、なかなか難しい状況ではないですか。その中で、あまり専門性がないようなことにこれからどんどん取り組んでいけというのは、逆行しているのではと思っていますが。

何かその社会教育面の意識が低いというのは、全体のその社会教育に向けた市民の意識をどうやって、何か高めていくというのは、何かいい事例があったらそういったことを取り組んでいただくなり、関金とかでも買い物環境の確保に向けたのが地域課題だということで、これから取り組もうとか、いい動きをしておられる協議会もあるではないですか。

だからそんなに低いという感じには思えないものだから、それが少し低くなったというのが、具体的に何なのというのを教えて欲しいと思っていたということです。

事務局長 具体的にどうですか、学習機会というのは、保障されているのですか。講座なり。

社会教育課長 そうですね。そういう生涯学習の機会などの企画はしておりますし、コロナのこともあったわけですが、機会の提供はやっておられます。

先ほど教育長も言われたように、地域よっての差がみたいなものもそこで感じることもあります。

これまで通り一生懸命に地域の人と協力しながら企画運営しておられるところもあれば、その役員さんに任せきりであったりとか、ちょっと協力体制が薄くなっているところとかそういう事を感じています。

市長 そうは言っても主事さんはあまり変わっていないですね。

社会教育課長 変わっておられないところもあります。

市長 二人目三人目の主事さんについては、コミュニティセンターにして一人追加したりして新たな形で、主事さんというのは昔ながらの話ではなかったかと思って。

社会教育課長 長く勤めておられる方もありますけど、新たに入って来られた方が中々続かないということも聞いてはおります。それは、コミュニティセンターそれぞれ事情、状況が違うところがありますので。最低限といいますか全体の底上げはしていきたいというふうには思っています。

教育長 先ほど市長がおっしゃったように、社会教育とは人づくりなのです。そのあと次にどう繋げていくかということなのですが、その人づくりにかかわる部分のところのコミュニティセンターの活動が本当に、今やっておられることで、大丈夫なのだろうかと思ってしまうところが若干あって、皆が楽しいイベントはされます。色々されますが、その活動の内容が本当に地域の後を担う担い手づくりに繋がっているかどうかということの方がやはり気になる地域があるということです。

市長 ちょっと何かその辺りが、せっかくその運動会であろうが何か地域のイベントであろうが活躍してくださる人たちを集めるだけでも、とても大変だろうと思っているのです。

教育長 そうです。そうなのです。

市長 だけど、少なくともそういう事なら、役員とプラスαに声かけられて、それでも若い方々が運営に携わってくださることで、顔が見え、その人たちが今後の関わりに一歩近づいていくというような恰好なので、別に悪いことではないかと思っているのです。

それが今度は勉強みたいな格好で、先ほどの人権学習であったり、色々なそういう地域の勉強会みたいな部分でも、声かけられる。そういった参加に繋がっていくのではないかなと思ったから、何が、現実にもその意識が低いというのは、現実的にどんな状況かなと思っただけです。

委員 地域づくり支援課が市長部局に移ったということで、教育委員会の社会教

育課は何をすればいいのかというのは、個人的に、教育委員としての疑問というよりも、不安なのか、問題意識なのか、その中で今日初めて地域づくり支援課のこの資料を見ました。これを見る限りでは何をされたいのかわかりません。予算の配分が書いてあるだけで、要するにどういうテーマで防災については、市長部局としてはこう考えているので、こういうテーマについて各コミュニティセンターで検討してみてくださいとか、そういったものが出てくるかと思ったのですけども、これだけではよくわかりません。やっておられるとは思いますが、そこを今日は本当に聞きたかったというのが本音です。

委員

私もこれ、予算は確かにありそうで、どういう具合に関わっていくのか、本当に新しく一人追加して、その方が地域支援ということで、まず、こういったところにどうやって関わっていくというのが見えない状況なので、そこをきちんとお金ではなく、こういうことに関わって地域づくり支援課としてはやっていきたい、社会教育課から受け継いだことをこうしていきたいということを示していただけたらと思いました。委員と同じ意見です。各コミュニティセンターから社会教育主事になってもらうのですよね。

社会教育課長
委員

はい。年次的に

その方がずっと引き続きしてくださればいいのですが、入れ替わって資格を取りに行ってもまた続かないということもあるので、やはりその辺りはしっかりとサポートはしていただいて、地区によってはずっと長い間関わっていただいている所があるし、あるところは、やはりそれぞれ課題を持っておられるので、そこを重点的にされていくのだけでも、やはり人が変わってしまうと、どうしてもそこが弱いところがあるといった意見もあったかなとは思いますが。

今、地域の青少協に関わっているのですが、結構いい具合にどんどん小学校のPTAの方から何人か入って、次々行けるような今状況になっているので青少協はもう安定してきていて、次があるので、私が全然関わらなくてもいつ身を引いてもいいなというような状況です。

ですから、次の世代を少しずつ見ていきながら、作っていただくような仕組みをとっていただきたいし、それは結構新興住宅もありますから若い人もいるのですけども、でもやはり山間地でいくと、これも地域の方で、そういう活動をしたという方もやはりいらっしゃるの、そういう方を掘り出しただけのような仕組みを作っていくと、いいのかなという感じはします。

委員

市長部局に持ってきたという重点施策であるならば、そこをもう少し見えるように、災害があったときにどうするのだとかという、色々なテーマがあると思うのです。市長部局として市役所としてはこういうふうにやっていただきたいという、テーマがあって、それであと自主的に各コミュニティセンターがそれに向かって、活動を続けていく。そうすると倉吉市の13

コミュニティセンターが同じような歩調で従事してくるのではないかと。あとは独自の行事を入れていくと。公民館の毎月の活動、コミュニティセンターだより、あれを見ると、やはり温度差がすごくあるのですよね。

小鴨はすごく充実しているなというふうに感じますし、何か行事をしないといけないのではないかというような切迫感が、各コミュニティセンターの中にはあるのではないかと思うのです。紙面を埋めるためという言い方はおかしいのですけども。そうするとやはり定例な行事を特に入れていくとかということでは終わってしまうという。あとは公民館長会等でお任せしてしまうとか、コミュニティセンター自体が音頭を取っているところとあまり取っていないところもあるのかなと。そこのところをしっかりとグリップしていただくのが今回のねらいではないかなと思うのです。だから独居老人宅のケアとか、災害のケアとか、それから子ども会等のリーダーを育てていくとか、そういったものをしっかりと色々な行事を通じてやってくださいねという趣旨なのかなと感じていますので、たまたま私が見えてないだけかもしれませんが、そこのところをもっと住民の方に見えるようにしていただくと、もっともっと理解が深まるのではないかと思います。

委員

先ほどから社会教育課長とか教育長が言われてた公民館研究指定事業が、人材育成にどのようにいいのか、私自身が実際に感じたところでお伝えしようかと思うのですが、PTA会長をしていた時に、地域の館長さんたちと一緒に行事をお手伝いしても、そんなに話をする機会もなく、女性と男性でちょっと女性がキッチンの方に行ったりとか、男性とちょっと違う役割をしたりとかというのがあって、館長さんたちと同じように仕事をするのがあったとしても、そんなに地域の方とかと話することはほとんどなく、「一緒に手伝いました。」「ボランティアをしました。」というところで終わってしまうのですが、公民館の座学の場になると、それぞれある課題に対してそれぞれの皆さんが持っておられることを話してくださるので、そういう思いで、会長としてそれに参加する機会があったりすると、子どもたちの面倒を見てくださっている方がいらっしゃるとか、そういうことを知る機会になったと感じるときがありました。

1回会長をただただそれですべてわかるわけではないのですけど、後々、もしよかったらこういうのをしているからおいでよと誘われて行ったりする中で、より一層館長さんたちとか、当時の公民館がどんなふうなことを考えてしているのだなというのを少しずつでないとうからないのですけど。そういう会議の場で、こういうふうにいるみたいなことを直接聞く機会というのがあったからこそ、館長さんたちにこんなにお世話になったのだと思ったりもしたし、代々のPTA会長が女性の方というのが一時期あったのですけど、その何代か前の方も、先生の歓送迎会の時に、館長さんたちも来られてみんなで話をする時に本当に、館長さんたちには子どもたちのために、

こんなにしていただいて感謝の言葉しかありませんという言葉をおられたのですが、それもやはりPTA会長をしているだけではなくて、公民館のそういう館長さんと関わる中で、子どもたちのことをこんなにしてもらっているのだという感じの気持ちがあって、その方は、そのあとコミセンの立ち上げ時に、副会長か何かの立場もされていて、そういう経験をしているからやはりそのあと、地域で何かあるときには、できるだけお手伝いしよう、私達もしてもらったからという気持ちも育って行って、そういうので、若い人たちの後継者も少しずつでも育っていったりするところがあるのかなと思うと、お二人がおっしゃっていたことがすごく私は大切だな、地域の人、次の世代を育てるという意味で大切な事業だったのではないかなというのは実感として感じています。

市長

その指定事業とかをやっていないというところは、そういう機会がなくなってしまふのかもしれないけど、何かその分ある程度、主事さんも加わって、継続事業はどっこも同じように毎年テーマを変えて、通常の事業計画の中で併せて行うというのは、大体、同じようにやっているだろうという感じがしていたものですから、そのコミュニティセンター化によって、地域が主体的に社会教育も含め、まちづくり、防災だとか福祉だとか、そういったところを各それぞれ地域で担っていく、或いは担っていく人材を育てていくのだというような、位置付けを持たせているという意味合いなので、金太郎あめみたいに皆がこういうことをしてくださいということは確かに言うておらず、これまでの地域の公民館としての色々な歴史だったり、取り組み内容があるから、一律にできるかと言うと、またその辺が難しい面もあるところもあって、その辺りで差が広がってきたりしている部分があるのかなという感じは思いますけど。

例えば、いい動きをしておられる小鴨のコミュニティセンターの事業内容とかを横展開をさせるなり、こういったことをやっておられるコミュニティセンターもありますよということを、情報共有していく。要はそういった取り組みを新たに追加していただくようなことを検討していただくみたいなことも必要かなと思います。

(委員 意見なし)

事務局長

丁度、システム、組織が変わった過渡期というところもありますので、不安な面もある。懸念される部分もあるというところで、これから社会教育なり地域づくりがどうあるべきか、きちんとやはりこう全体像を、役割分担というか一緒にやるところ、そういうところがはっきりと見えてくれば、また整理もできてくるのかと思います。当然担当課の連携はもちろん大事だと思うのですが、コミュニティセンターとも、地域ともしっかりと連携を図って進めていければと思います。

(5)令和5年度倉吉市教育委員会の重点施策に基づく実施計画について

(別冊資料により各課館所長説明)

委員 3ページの公民館活動の推進ですが、先ほどお話があったとおり、地域づくり支援課とタイアップをしっかりとっていただき、活動を行っていただきたいと思います。

13ページ社会教育課、各種研修の中で11月のハラスメントスポーツ指導者研修会というのが予定されていますが、体罰のこともあるし、もっと早い時期に複数回やるべきではないかと思います。その辺り検討していただきたいと思います。

15ページ文化財課、オオサンショウウオの保護というのは具体的に何をされるのか教えてください。

教育長 大水が出たりしたあとに、流されて出てくるオオサンショウウオを元の生活水域へ戻します。

委員 理解しました。

(委員 意見なし)

事務局長 それでは長時間にわたりまして、議題について多くのご意見をいただきました。以上を持ちまして令和5年度第1回総合教育会議を閉じたいと思います。ありがとうございました。

午後5時05分 終了